九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

The Nature and Function of Images in the Science Fiction Works of Philip K. Dick

ブアリブ, アラン

https://doi.org/10.15017/1500468

出版情報：九州大学, 2014, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

KYUSHU UNIVERSITY

氏　　名	Allan BOUARIB
論　文　名	The Nature and Function of Images in the Science Fiction Works of Philip K. Dick （フィリップ・K・ディックの SF 作品におけるイメージの性質と機能）
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教　授　小谷 耕二 副　査　　九州大学　　教　授　阿尾 安泰 副　査　　九州大学　　准教授　杉山 あかし 副　査　　九州大学　　教　授　高橋　勤 副　査　　奈良女子大学　　教　授　竹本 憲昭

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、アメリカの SF 作家フィリップ・K・ディックの作品に見られるイメージの性質と機能を多面的に考察したものである。ここでイメージとは狭い意味での比喩表現や心的イメージを指すのではなく、広く作中で別の実体の表象あるいは複製とみなされる事物や実体のことを意味しており、模型や地図、人形などのイコンとしての事物のほか、人間の模造としてのアンドロイドやロボット、エイリアン、神的存在が含まれる。またメディアがつくりだすヴァーチャルなイメージに加えて、記号としての商品も考察の対象となっている。ディックの作品には現実が崩壊あるいは変容する場面が頻出するが、本論文では、そうした場面にこれらのイメージがどのように作用しているのか、これらのイメージと人間の現実にたいする知覚とのあいだにどのような関係があるのかといった問題を三つの角度から、すなわち（１）形而上学的な角度、（２）社会的経済的角度、（３）精神分析的ないしは文学的角度から検討している。現実とそれにたいする知覚という古くて新しい哲学的課題に関して、まず理論的考察を行い、次に具体的に作品を解釈するという論述方法を用い、数多くのディック作品に言及しながら、現実にたいする相反する見方を共存させたディック像を提示した論文である。

本論文の構成と概要は以下のとおりである。

序章では、ディック作品におけるイメージの複合的な重要性を指摘したうえで、本論文で用いる分析概念を説明し、本論文の構成について述べている。

第１章では、イメージの形而上学に焦点をあてて、オリジナルと複製（コピー）とのあいだにどのような関連がみられるかという問題を取りあげている。そして複製がその魔術的な力によってオリジナルの特権的な地位を脅かし、それに取って代わっていくことを明らかにしている。この章の中核をなすのは *The Three Stigmata of Palmer Eldritch* の詳細な分析である。従来この作品は社会的政治的角度から論じられてきたが、本論文ではこの小説に見られるイメージによる現実の転覆を、ジャン・ボードリヤールのシミュラークルという概念を援用しつつ説明し、Chew-Z というドラッグによってつくりだされた幻覚の世界が、いかに現実と不可分なものとなり現実を覆いつくしていくかを分析している。またその幻覚の世界のなかにさまよう登場人物たちの姿を、電脳空間のさなかに失われ浮遊するポストモダン的主体を描きだしたものとみる解釈を呈示している。

第２章では、イメージを社会的実践とみなす観点から、人間の社会関係においてさまざまなイメージや、世論調査、選挙制度、商品流通などの媒介システムが果たす役割を考察している。ディッ

クのメディアに関する言説には、メディアをイデオロギー操作、社会統制の透明な道具とみなす見方と、メディアが人間の意識そのものを形づくるという見方が共存しているが、本論文ではとくに後者に焦点をあてて、他者からの疎外や自己疎外が、欲望の物象化や、人間の主体とメディアの産物とのあいだの偶像崇拝的関係によってもたらされることを、ギ・ドゥボールのメディア論を援用しつつ論じている。

第３章では、イメージ、あるいはファンタジーに関してディックのテクストに見られる見解を検討し、ファンタジーが一方で現状批判の力をもちながらも、他方で社会的不満の安全弁として機能しうることにたいするディックのアンビバレントな態度を指摘している。また精神分析的観点から三つの短篇を取りあげ、それぞれの作品においてファンタジーが願望充足、権力の担い手、体制転覆的活動という機能を果たしていることを論じている。同時にファンタジーがディック自身の文学的営みにたいする間接的な批評ともなっていること――つまり、ファンタジーを書く行為が具体的現実にたいする挑戦でありながら、同時にそれを支える自己の自律性にもたえずディックが疑念のまなざしを注いでいることを指摘している。さらに、ジェンダー的視点を導入し、ディックが現実原則をそれ自体ジェンダー化されたものと捉え、女性の登場人物をファンタジー、とくに現実への反抗としてのファンタジーにたいする敵対者とみなしていることを明らかにしている。

結論部においては、上述の論旨をまとめたうえで、ヒューマニストとしての側面とポストモダニストとしての側面をあわせもつ作家としてのディック像を提示し、さらに今後検討すべき課題について言及している。

このように本論文は、フィリップ・K・ディックをたんなるエンターテインメントの SF 作家としてではなく、現実の「現実性」にたいして相矛盾する見方を共存させ、その緊張関係のなかで現実とどうかかわるかという問題に取り組んだ本格的な作家として捉え、その作品群におけるイメージの性質と機能を多面的に論じ、その諸相を明らかにしている。論文の構成は明確であり、論述も手堅く緻密に展開されている。本論文が従来の研究の方向性をラジカルに転換させたものとはかならずしもいえないが、マルクス主義的批評やポストモダニズム的観点からの批評の双方を発展的に継承し、各所で著者独自の見解を加えつつ着実にディック研究を前進させている。ポストモダンの現代思想やメディア論を駆使していくつかの作品を詳細に分析しつつ、同時に論述において言及されるディックの作品は広範囲に及んでおり、明確な視点からなされた包括的なディック研究であるといえる。博士（比較社会文化）の学位に値するものと判断される。